アリー・イブン・リドワーンの『テトラビブロス註解』について

平成 27 年 4 月 20 日受付

山　本　啓　二*

要　旨

11 世紀のカイロで医者として活躍したアリー・イブン・リドワーンは，プトレマイオスによる占星術書『テトラビブロス』に対してアラビア語で全文註解を施している。この『テトラビブロス註解』は 13 世紀にラテン語に翻訳され，さらに 15 世紀には印刷され，広くラテン世界にも知られるようになった。アリーはその註解を書く際に，フナイン・イブン・イスハークによるアラビア語版を用いていた。筆者は現在フナイン版テキストの校訂版を準備しているが，その場合に，13 世紀以降のものしか残っていないフナイン版の写本以外に，11 世紀にアリーによって註解書に引用されたフナインのテキストも参照すべきであることを認識するに至った。

キーワード：プトレマイオス，テトラビブロス，アリー・イブン・リドワーン，占星術，アラビア科学

1. はじめに

2 世紀のアレクサンドリアで地球中心説に基づいて『数学的集成』（後に「アルマゲスト」として知られる）という天文学書を著わしたプトレマイオスは，『テトラビブロス』（または『アポテレスマティカ』）と呼ばれる占星術書も書いていた。これらの著作は 9 世紀以降に，複数回にわたってアラビア語に翻訳され，さらに 12 世紀にはともにアラビア語からラテン語に翻訳された。そのラテン語版は 15，16 世紀には印刷出版され，ヨーロッパで広く流布するに至った。こうして，それらは中世のイスラームと西欧ラテンの両世界において，天文学と占星術の両分野で最も権威ある著作となり，17 世紀に至るまで大きな影響を及ぼしたのである。

ヨーロッパでは，占星術は権力者（例えば，神聖ローマ皇帝ルードルフ 2 世（1576-1612），ローマ教皇パウルス 2 世（1464-71），シクストゥス 4 世（1471-84），アレクサンデル 6 世（1492-1503），ユリウス 2 世（1503-13），レオ 10 世（1513-21），パウルス 3 世（1534-49）など）によって利用されただけでなく，17 世紀まで学問として扱われ，大学でも講義がなされていた（例えば，ボローニャ，フェッラーラ，パドヴァ，ナポリ，ピサ，パリ，クラクフなどの大学）[1]。

* 京都産業大学文化学部

また，ルネサンス期の多くの思想家の観点からすれば，占星術はただのイデオロギーではなく，科学であった。占星術は，自然世界に関する情報を確認し，確信を得ることのできる知識であった。それは長年にわたって蓄積された観測と経験に合致しているようにも思えた。さらに，その方法はあらゆる知識を集めるという，当時の認識方法にもかなっていた。占星術は実験ではなく経験的手法を用い，そのようなものとしてルネサンス科学の，そして部分的ではあるが近代科学の一部だったのである。しかし，ルネサンス期の思想家が占星術に合致しない方法を考案し始めるようになると，占星術はしだいに支配力を失っていった。

占星術と科学に関る問題を理解することは，自然観の形成に関する基本的な問題を理解することであり，おそらく，ルネサンス以来，しだいに現れてきた「科学」の複雑な起源にさらに光を当てることなのである[2]。

以上のことを踏まえて，筆者は中世以降に大きな影響を及ぼしたプトレマイオスの伝承を原史料に基づいて解明するために，アラビア語テキストの校訂版を作成することが最優先すると考える。本研究はその作業の一環を成すものである。

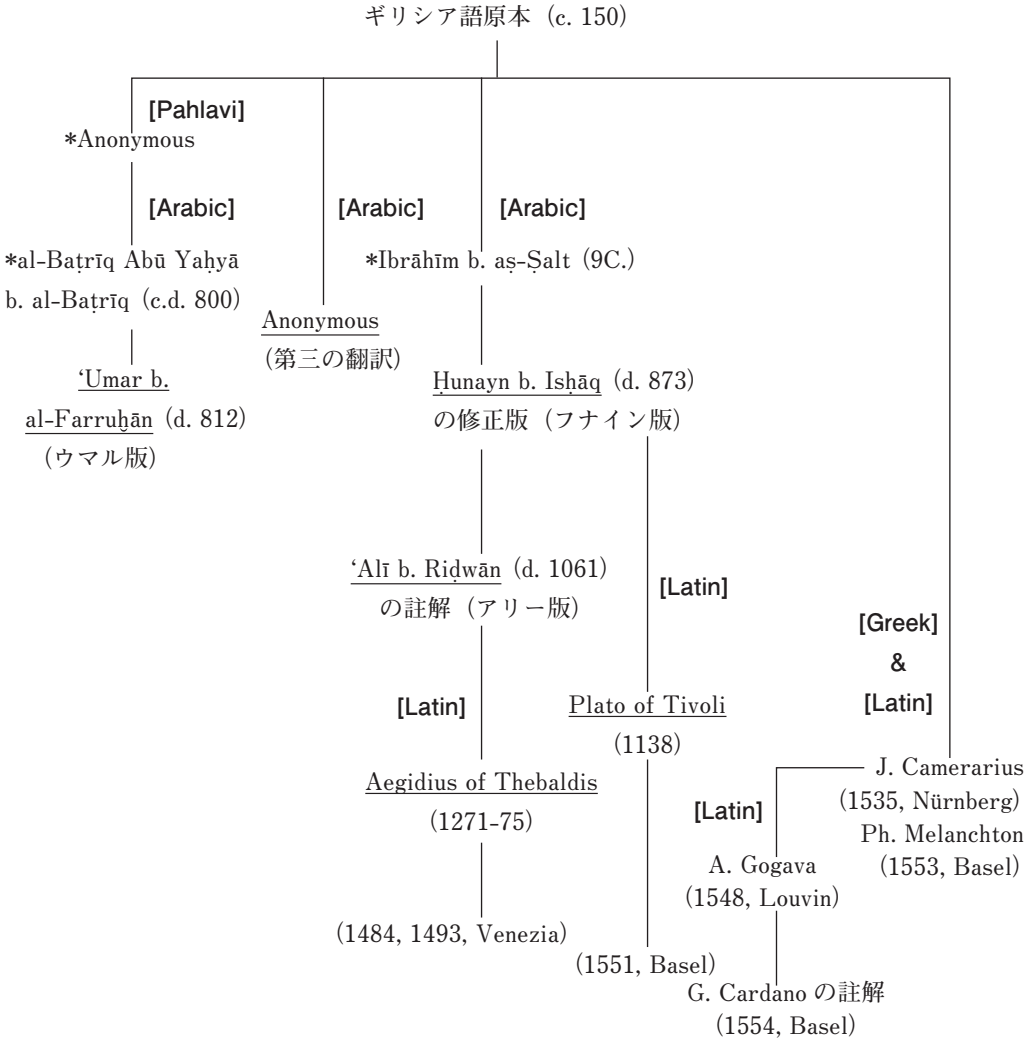
2.『テトラビブロス』の伝承

『テトラビブロス』の伝承についてはすでに 2007 年に報告したが[3], その後の研究を踏まえて修正し，補足したものが以下の表である。* はその人物のテキストが写本で残っていないことを，また，下線はその人物のテキストが写本で存在していることを示している。また 15 世紀以降のテキストについては出版年と出版地を示してある。

ルネサンス期の西欧では，アラビア語訳からのラテン語版とギリシア語からのラテン語版が両立することになった。この状況は，ペルシア・アラビアの影響を受けた占星術の伝統に従おうとする者たちと，ギリシア時代の占星術の教義からあまりに遠ざかってしまった占星術を批判する者たち（例えば，ピーコ・デッラ・ミランドラやカルダーノ）の対立を物語っている。[4]

また, カメラリウスが 1535 年にニュルンベルクで出版したギリシア語版は, その後何度も印刷され, 20 世紀まで使われ続けた[6]。この 1535 年版には，ギリシア語テキストの他に，カメラリウスによる第 1 部と第 2 部のラテン語訳と，第 3 部と第 4 部のラテン語の要約が付けられていた。それに基づいて 1548 年に全 4 部のラテン語訳を出版したのは, アントニオ･ゴガーヴァであった。このゴガーヴァの翻訳はカトリックの世界で標準的なものとなった。

それに対して，ルター派の宗教改革者メランヒトンが 1553 年にカメラリウスのギリシア語テキストの改訂版に基づいて新たに翻訳した版は, プロテスタントの世界で標準的なものとなった。カルダーノが「テトラビブロス註解」（1554 年）に用いたのは，ゴガーヴァの翻訳であった。



2007 年の段階ではアラビア語訳としてウマル版とフナイン版の 2 つのみが存在しているとしていたが，最近になって第三の翻訳の存在が明らかになった。この翻訳が見られる写本（MS Istanbul University Library 6141）には，訳者名も執筆時代も記されおらず，冒頭から第 2 部第 3 章の途中までしか含まれていない。このテキストは註解でも要約でもなく，明らかに独立した翻訳である。これについては，本稿のテーマとは直接関係がないので，別の機会に詳しく報告するつもりである。

3. アリー・イブン・リドワーンの『テトラビブロス註解』について

988 年にカイロ近郊に生まれた医者のアリー・イブン・リドワーンは『テトラビブロス』に対する註解を書いていた。この注解書は，カスティーリャ王アルフォンソ 10 世の命で 1256 年にパルマのアエギディウス・デ・テバルディスによってラテン語に翻訳され，1484 年にヴェネツィアで出版された。アリーは注解をするに際して，フナイン版のテキストを用い，その全文を少しずつ引用してその後に自分の見解を述べていた。したがって，アリーのテキストは「プトレマイオスいわく…」と「註解者いわく…」で始まる文章が交互に並ぶ形式をとっている。「註解者いわく…」で始まる註解の数は，全部で 1167（第 1 部 299，第 2 部 277，第 3 部 298，第 4 部 293）に及ぶ。

ピーコ・デッラ・ミランドラ（1463-94）は，1493 年から 94 年にかけて執筆した『予言占星術駁論』（Disputationes adversus astrologiam divinatricem）の第 10 巻第 6 章でアリー（アヴェンローダ，Avenroda）に反駁している。1494 年に亡くなったピーコはアリーの 1484 年か 1493 年のラテン語版を用いたのであろう[5]。

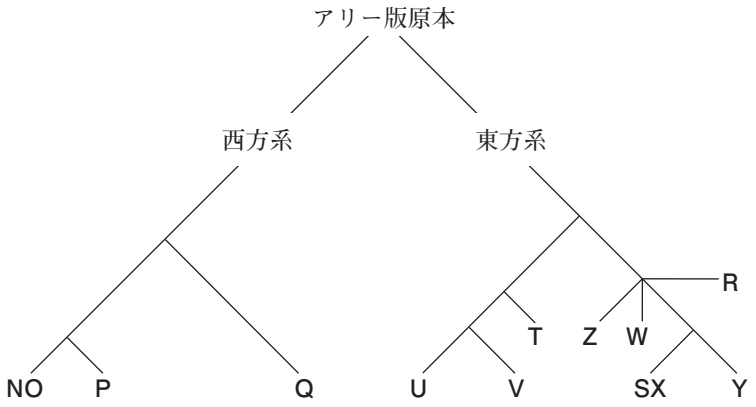
現在手元にあるアリー・イブン・リドワーンによる註解の写本のコピーは，以下の 14 種類である。

N = Oxford, Bodleian Marsh 206（201 ff.）
O = Escorial 916/1（130 ff., 10C. H）
P = Escorial 913（126 ff., 745 H），第 4 巻はヘブライ文字で書かれている
Q = Princeton 5050（144 ff., 8-9C. H），第 1 巻と第 2 巻のみ
R = Tehran, Millī 1729（200 ff., 1113 H）
S = Tehran, Millī 33481（230 ff.）
T = Tehran, Malik 3432（253 ff., 1238 H）
U = Tehran, Dānišghāh 474（171 ff., 1236 H）
V = Tehran, Mağlis 191（124 ff., 1284 H）
W = Tehran, Mağlis 3789（199 ff., 1274 H）
X = Patna 2475（195 ff., 1159 H）
Y = Rampur 4188（104 ff., 11C. H）
Z = Rampur 4189（279 ff., 1123 H）
Wien 2380（238 ff.）

写本年代が判明しているものに限れば，最古の写本はヒジュラ暦 8 世紀（西暦 14 世紀）の P である。書体は，NOP がマグリビー体であり，その他はナスヒー体である。なお，Wien 2380 は，「テトラビブロス」の本文はアラビア語で書かれているが，註解部分はトルコ語になっている。

現在までに判明している写本相互の関係は以下のとおりである。写本の系統関係を判断する主要な要因は，註解箇所の欠落部分である。1167 の註解部分のすべてを含む写本はひとつもなく，必ずど

れかを欠いている。例えば，第 2 巻について言えば，西方系統には欠落はないが，東方系統ではすべての写本が 264 番目の註解を欠いている。



アリーが全文註解を完成させたのは，11 世紀半ばである。したがって，彼が用いたフナイン訳のアラビア語写本は，新しくても 10 世紀から 11 世紀前半のものだったはずである。フナイン･イブン･イスハークがアラビア語訳を完成させたのは 9 世紀後半のことであるから，フナインの翻訳原本とアリーが用いた写本との時間差は 160 年ほどだと考えられる。年代が確認できる限り現存する最古のフナイン版アラビア語写本（フィレンツェ写本）が 15 世紀のものであることを考えれば[7]，少なくとも 11 世紀のフナイン版の情報を含むアリーの版は極めて重要な意味を持ってくる。すなわち，フナイン版のテキストを校訂するに際して，アリーが引用しているテキスト，いわゆるアリー版が大いに参考になると考えられるのである。

アリー版写本は東西の 2 系統に分けられ，西方系統が比較的古い伝承を残していると考えられる。ただしアリー版のラテン語訳が基にしたアラビア語写本が西方系かどうかはまだ不明である。いずれにしても，フナイン版テキストの校訂には，フナイン版の写本以外にアリー版の西方系写本 NOP を用いることが妥当だと思われる。

すでに述べたように，ギリシア語からアラビア語に翻訳されたフナイン版は 9 世紀に作られたものである。それに対して，現在残っている『テトラビブロス』のギリシア語写本は 13 世紀以降のものである。[8] したがって，フナイン版が現存するギリシア語写本よりもよいテキストを伝えている可能性があり，この点にこそ，アラビア語校訂版を作ることの最大の意義があるのである。

4. アリーの註解に見られる特徴

アリーによる註解にはいくつかの興味深い内容が含まれているが, ここでは 2 点のみを報告したい。まず，アリー以前のイスラーム世界では，学者のプトレマイオスがプトレマイオス朝の王としばしば同一視されてきたが，アリーはこのことを明確に，以下のように否定している。「明らかな伝承しか

知らないアブー・マアシャルやその他の歴史家たちについて言えば，彼らの知識不足のために，この問題は彼らにとって疑わしいものとなっている。彼らは，このプトレマイオスが，アレクサンドロスの直後に生き，この名前で知られていた，アレクサンドリアの王のひとりであると考えた。すなわち，彼らのうちのある者は，知識への愛から，可能な限りのあらゆる分野の学者や書物を集め，「教養を愛するプトレマイオス」（Baṭlamiyūs min muḥibb al-'adab）[9] と呼ばれるに至った。しかしこの人物はこの書を書いたプトレマイオスよりもずっと前の人である。なぜなら，これらの王がローマの王よりも前に存在したことにすべての歴史家がすでに同意してきたからである。」[10]

さらに，アリーは 1006 年の超新星について，次のように記述している。「私が教育を受けはじめた時に見たある流星（aṯar）のことをあなたのためにここに記しておこう。この流星は太陽とは反対側のさそり宮に現れた。その日は太陽はおうし宮の 15 度に，そして流星（al-nayzak）はさそり宮の 15 度にあった。それは形が丸く大きな流星であり，大きさが金星の 2 と 1/2 倍か 3 倍であった。その光は地平線を照らし，非常に輝いていた。その明るさは月の明るさの 1/4 かそれ以上であった。それは見え続け，太陽がおとめ宮にあって、それと六合（60 度）になるまで赤道の運動（日周運動）とともにその宮（さそり宮）の中を動いた。そしてそれは突然消えた。私が述べたそのことはすべて目で見たことである。この出現は，私が記録したと同じように，現代の学者たちによっても観測されたのである。そのように現れ始めた時の惑星の位置は，太陽と月がおうし宮の 15 度，土星がしし宮の 12 度 11 分，木星がかに宮の 11 度 21 分，火星がさそり宮の 21 度 19 分，金星がふたご宮の 12 度 28 分，水星がおうし宮の 5 度 11 分，月の昇交点がいて宮の 23 度 38 分である。その流星はさそり宮 15 度に現れた。この流星がエジプトのフスタートに現れた時に（太陽と月が）合となった時のアセンダントは，しし宮の 4 度 2 分であった・・・。」

ゴールドシュタインによれば，この星は 1006 年におおかみ座に現れた超新星であった。[11]

5. おわりに

現在判明している限りでは, ウマル版の写本数は 3, フナイン版の写本数は 9 である。それに対して, アリー版の写本は少なくとも 15 あり, さらにペルシア語訳とトルコ語訳も存在していることがかわっている[12]。こうしたことからもわかるように，アリーの注解は東西において広く注目を浴びてきたのである。しかし，アリーの注解部分だけでも「テトラビブロス」のテキストの 3，4 倍の量になるという理由からか，その内容の全貌は未だに解明されていない。いずれアリー版の注解部分の校訂版も必要になると思われる。

注

1）Wolfgang Hübner, 'The Culture of Astrology from Ancient to Renaissance', *A Companion to Astrology in the Renaissance*, ed. B. Dooley, 2014, pp. 17-58. ドイツのヴィテンブルク大学のように，設立にあたって占星術によって日程を決定した例もあった。

2) Brendan Dooley 'Astrology and Science', *A Companion to Astrology in the Renaissance*, ed. B. Dooley, 2014, pp. 193-266.

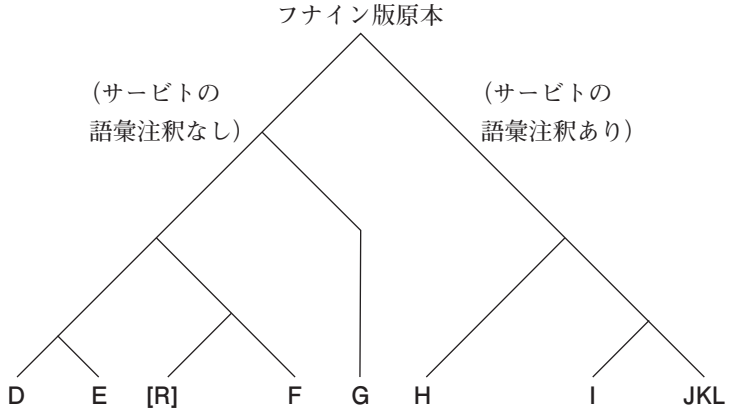
3) 山本啓二「中世における『テトラビブロス』の伝承の研究」『京都産業大学総合学術研究所所報』第 5 号, 2007 年, pp. 1-7.

4) H. Darrel Rutkin, 'The Use and Abuse of Ptolemy's *Tetrabiblos* in Renaissance and Early Modern Europe: Two Case Studies (Giovanni Pico della Mirandola and Filippo Fantoni)', in *Ptolemy in Perspective* ed. by Alexander Jones, 2010, pp. 135-149.

5) この版に代わるものとして，1940 年に 2 つのギリシア語校訂版が出版された。F.E. Robbins が英訳付きで出版したロウブ版と，F. Boll と A. Boer によるトイブナー版である。その後出版された校訂版には，S. Feraboli が 1985 年にイタリア語訳とともに出したものと，W. Hübner が 1998 年に出したトイブナー版の新版がある。ちなみに E. Garin はピーコの『予言占星術駁論』の校訂版（1952 年）の巻末に詳細な補注を付けているが，彼がそれを執筆する際に利用した『テトラビブロス』は，この 1535 年版であった。

6) Pico della Mirandola, *Disputationes adversus astrologiam divinatricem*, ed. E. Garin, Firenze, vol. II, 1952, pp. 388-393. アリーは通常ハリ（Haly）というラテン名で知られており，少なくとも『テトラビブロス』の 1484 年版には Haly と Ali ibn Rudhwan という名前は見られるが, Avenroda という呼び名は見られない。W.W. Westcott, *Bibliotheca Astrologica*, California, 1977, p. 125 参照。

7) フナイン版のアラビア語写本の系統関係は以下のとおりである。2007 年版と異なるのは，新たに 2 写本を加えたことと，写本記号を変更したことである。サービト・イブン・クッラ（9 世紀）による語彙注釈を含むかどうかによって，2 系統に分けられる。



D : Nağaf, Maktabat al-Imām al-Ḥakīm 236, (1137 H)

E : Tehran, Aṣġar Mahdawī 486, (1027 H)

F : Escorial 1829/1

G : Dublin, Chester Beatty 4566, (AH 10C. H), I.9-III.3 のみ

H : Firenze, Laurenziana 352, (893 H)

I : Tehran, Dānišgāh 830

J : Cairo, Dār al-kutub, mīqāt 1054, (ca. 1100 H)

K : London, British Library or. 9115, (1098 H)

L : Damascus, Ẓāhirīya 7974

[R]：アリー・イブン・リドワーンが用いたテキスト

8）Clavdivs Ptolemaevs, volvmen III 1, Apotelesmatika, ed. W. Hübner, Stuttgart and Leipzig, 1998, pp. xi-xvii.
9）J.A. Seymore（*The Life of Ibn Riḍwān and His Commentary on Ptolemy's* Tetrabiblos, 2001, Ph.D. Thesis, Columbia University, p. 209）によれば，プトレマイオス 2 世フィラデルフォス（前 284-246 年）のこと。
10）写本 **O** の ff. 2r-2v.
11）写本 **O** の f. 64r. B.R. Goldstein, 'Evidence for a Supernova of A.D. 1006', *The Astrolonomical Journal*, 70, 1965, pp. 105-114 参照。
12）F. Sezgin, *Geschichte des arabischen Schrifttums*, Band VII, Leiden, 1979, p. 44.

Alī ibn Riḍwān's Commentary on Ptolemy's *Tetrabiblos*

Keiji YAMAMOTO

Abstract

Alī ibn Riḍwān, who was a doctor in Cairo in the 11th century, commented on the *Tetrabiblos* composed by Ptolemy in Alexanria in the 2nd century. Alī's commentary, which was translated into Latin in the 13th century and published in the 15th century, was known widely in the Middle Latin West. When he wrote his commentary, he cited the whole text of the *Tetrabiblos* translated by Ḥunayn ibn Isḥāq in the 9th century. After studying several manuscripts relevant to the text, the present auther, who is preparing for a critical edition of Ḥunayn's version of the *Tetrabiblos*, comes to realize that manuscripts of Alī's version as well as those of Ḥunayn's should be uesd in order to edit the text.

Keywords : Ptolemy, Tetrabiblos, Ali ibn Ridwan, Astrology, Arabic Science